復刊第78号
題字　吉岡弥生

訪中旅行印象記

会長　三神　美和

一、はしがき

三月七日日本女医会広報部より、中国旅行記を四月号に間に合うように書いて欲しい、〆切は三月十七日、枚数は五枚という速達をいただきました。あまり突然であり、期日も迫っておりますし、また二週間の旅行の記事をかくのには枚数が少ないのですが、一応お引き受けしました。それで限られた枚数範囲で旅の印象記を書かせていただき、いずれ機会をみて旅行記をのせさせていただくことにしましたことをご諒承下さい。

二、日本女医会訪中旅行団結成から出発まで

昭和五十年春、日本交通公社海外旅行課の四方田課長が来訪され、中国旅行のための窓口をつくったので、日本女医会なら許可されると思うので、訪中旅行の計画をたてたらどうかという勧誘がなされました。その当時、中国旅行はまだ困難な時で、限られた団体が許可されるだけでありましたので、白羽の矢を立てられた本会として如何にすべきかを理事会にはかりましたところ、皆さんの賛成が多かったので、日本交通公社に必要な手続きをお願いしました。半年か一年で許可がくるらしいとの事でしたが、一向に返事がなく、忘れかけていた昨年（五十三年）八月、中国から許可が来たことを交通公社から知らされました。これは日中平和友好条約締結の直前であり、第十六回国際女医会出発の直前でありました。招待の形で行かれた先生方のほかには、まだ中国に行かれた方は少ないので、多数の方々が参加されることを期待しておりましたが、厳寒ということと、正月三日から二週間という時期の関係からか応募者が少なく、漸く十一名の参加者を得て、一月三日成田空港を出発したのであります。会としての正式訪中団でありますので、定員の二十五名まで参加者が欲しかったのでありますが残念でした。ご参加された方は（敬称略）添田百枝、峯信、土田巴、宮崎ミヤ、宮崎波ツ美、政川ゆき、村山浜江、大場須賀子、池内順子、戸部ミイツの諸先生で、それに交通公社の外川宇八氏が付添い、私が団長として同行しました。比較的年輩の方が多い中に、一人昭和四十六年東女医大出の池内順子氏がご参加されたことはうれしいことでした。

三、中国旅行の特異性

中国旅行が他の諸外国のそれと違う点は、中国国際旅行社（国営）が、一切の旅程、見学場所を決め、また旅行団のために旅行係員（兼通訳）を専属させて案内することであります。それで旅行者は出発し現地に着くまで、宿泊場所も見学場所も全然わからないので、留守宅から旅行先への連絡はとれないことになります。私どもも現地で旅行係員の説明をきくまで一切わかりませんでした。また第二の相異点は学校や病院、工場など見学する場合、まず必ず応接所に通され、そこでその責任者が歓迎の挨拶と概略を説明し、また見学後も感想をきかれることです。その都度団長は挨拶させられるのには閉口いたしました。

四、私どもの訪問地

私どもは成田空港を一月三日夕方出発し、香港に飛び、香港で一泊後、列車で国境を越えて広州市に到着し、四泊しました。その間、聾唖学校、西増路小学校、医科大学、病院など見学し、次いで飛行機で長沙市に行き、ここに三泊しました。ここは毛沢東の由縁の地で中国革命について多くを学びました。次に夜行列車で邯鄲市に行き三泊しましたが、ここで工場や人民公社など見学し、再び夜行列車で北京へと北上し、北京市に三泊して、広々とした古い都を見物して後、北京飛行場をあとにして十八日午後成田空港に帰ってきました。十四日間の旅行は毎日毎日が充実した日々でありました。新中国の一部を瞥見し、建国の意気にうたれた思いでした。

五、熱烈歓迎

日中平和友好条約締結後、始めて迎える訪中団であるという所が多く、そのためか非常に歓迎されました。特に邯鄲市は開放後日本人として始めて迎えた団体であるというので、工場に参りました時、その工場の保育園の子供達が頬を真赤に塗って、手に造花をもって、歓迎の歌を歌って出迎えてくれました。また広州でも聾唖学校、小学校でそれぞれ用意された踊りや独唱をして楽しませてくれました。古都邯鄲で迎賓館を宿舎に提供したこと、北京行きの列車に間に合わせるため、プラットホームの中へ私どものバスを乗り入れてくれたことなど心温まる思い出であ

日本女医会誌（第七十八号）昭和五十四年四月二十五日

目次

訪中旅行印象記……三神　美和……1
中国婦人代表団歓迎について……湯本　アサ……2
定時総会のお知らせ……2
Circular Letter No.53、No.54……佐野アヤ子……3
支部だより……
愛知県　森川みどり……4
東京都練馬区　石原　幸子……4
私にも言わせてほしい……佐藤千代子……4
学位取得者一覧表……5
森　千鶴先生を偲びて……川那部喜美子……6
理事会議事録……7
事務局だより……8
編集後記……8

ります。

六、教育、医学について

広州で聾唖学校と小学校を見学して、心をうたれたことは、先生も生徒も一体となって教育にうち込んでいる姿でした。四大目標を掲げて近代化をすすめている国の方針を忠実にうけとめ、教育によってこれを達成せんとする意気込みが汲みとれます。毛語録がいたる所に掲げられております。この様にして教育された子供達が大人となった時の中国を思う時、一種の恐れをさえ感じられます。

医学関係については、中山医学院（医科大学）広州人民医院、湖南中医学校を見学しました。

中山医学院の中医科で針治療をつぶさに見学しましたが感銘をうけたのは、そこの主任の女医呉秀錦氏のお話でした。この方は洋医を修め、後、病理学を研究し、そして針治療をされている方で、ちょうど小児麻痺の後遺症の針治療をしておりました。日本からの見学者が私共のほか一組あり、その先生達の質問に詳細に答え実技を示されました。が針治療の将来などについても話され、その道一筋に研究されている人のお話の深さに感銘をうけました。人民医院で針麻酔の手術を見ることが出来ましたが、大きな卵巣嚢腫を針麻酔で別出され、術中も患者は平気で眼をあけ話をしているのには驚きました。湖南中医学校は漢方を主体とする医学校で、ここも薬は漢方薬を用い、治療は針治療を行っておりました。麻痺や聾唖に針治療の効果あることを見せられたことは私どもにとって貴重な収穫でありました。

七、革命の歴史

私どもが旅行した広州市、長沙市などは中国革命に深い関係のある地であります。広州には一九二七年、「広東コンミュン」と称される武装蜂起が押しつぶされた時、犠牲となった数千人が葬られている広州起義烈士陵園があり、二十六万平方米の大きな公園でありました。革命の父孫文の出生地も近く、いたる所に孫文を記念する建物や名称が見られます。また長沙市は毛沢東が青年時代を過され、二十年も在住して革命運動を行った所だけに、第一師範学校、清水塘、愛晩亭など毛沢東の足跡がいたる所にあり、また長沙より一〇四粁西南の韶山は毛沢東の生家がある所でありました。年間三十万人が訪れるという。私どもが行った時も入口に長い列が連っておりました。生家の隣にある陳列館には毛沢東の少年時代から建国活動にいたるまでの状況が紹介されており、革命運動のきびしさをひしひしと感じさせられました。

以上書きつづっているうちに紙数を超過しましたので、長沙郊外の馬王堆漢墓のこと、邯鄲の人民公社その他、北京のことなど記したいことがたくさんありますが、この辺で筆を止め、最後に北京で昭和十四年帝国女子医専卒の王碧雲女史にお目にかかり、終戦直後、ご主人（九州帝大医学部卒）とともに北京に渡り、大変ご苦労された話、中国の医療のお話や戦前日本に留学された女医さんのことなど承り、感激したことをつけ加えたいと思います。女医同志の連絡とか、会合とかはないので、戦前の女医さんの消息はいっさいわからないということをうかがい、がっかりしました。戦前日本女医会々員であった王女史を本会の特別会員にでもしてあげられないかと思いながら、再会を約し、固い握手を交わして別れたのであります。終りにこの度の旅行中、終始十二名の一行は仲よく、楽しく旅をつづけ、日中親善の実をあげたことを申し上げます。またこのことは、一行の皆さまのご協力と、通訳者によい人を得たことによるものと存じまして、一行の皆さまと、中国国際旅行社並びに通訳者（旅行係員）廖朝粭氏に、心から感謝申し上げて旅行印象記の筆を擱きます。

一九七九、三、十一

万里長城入口にて

社団法人　日本女医会
第二十四回定時総会のおしらせ

総会

日時　昭和五十四年五月二十日(日)午後一時

場所　京王プラザホテル四階　花

東京都新宿区西新宿二―二―一

☎〇三―三四四―〇一一一

会費　二千円

懇親会（総会終了後）午後五時

場所　京王プラザホテル五階コンコード

会費　八千円

評議員会（総会前）午前十時

場所　京王プラザホテル四階　雅（みやび）

京王プラザホテルにお泊りの方は、予約の際、日本女医会会員であることを申し出た場合は、宿泊料を割引いたします。

中国婦人代表団歓迎について

東京都新宿区　湯本　アサ

中国婦人代表十五名が十二月一日から二十二日まで三週間来日されることになり、日中（日本中国）友好協会全国本部が中国婦人代表団歓迎委員会を東京及び大阪、静岡、和歌山、福岡、長野、高知、各地に結成して国内婦人団体三十有余と個人多数を加えて盛大な歓迎プログラムをつくりました。

日中平和友好条約が去る十月二十三日に発効してはじめて迎えた代表団なので、一入友愛に新鮮味を加えて、十二月二日の東京大会（全逓会館の歓迎集会及び日本教育会館のレセプション）では熱烈な友誼あふれる歓迎パーティで三百名余のにぎわいでした。

代表団メンバーは各分野における指導者であり活動家で、天の半分を支える名実共に中国婦人の代表で社会主義の四つの現代化（農業、工業、国防、科学技術の現代化）の実現の先頭に立って推進しておられる方々です。十五人の代表団の中に医生としては、ただ一人王栄和さん、背高もすんなりとした若々しい感じの人、わずか数分ではあったが医学についての話を交した。なおウィグル族の阿米娜さん、中央民族歌舞団俳優として参加され、まっかな服装に舞台化粧も美しくエンターテーナーとして中国の歌、おどり、その上日本の民謡まで上手に歌いこなして和やかな楽しい雰囲気を出さ

れました。

団長の黄甘英さんは中華全国婦女連合会副主席、中国人民政治協商会議常任委員で、一九六〇年（昭和三十五年）の広島世界原水禁大会に、翌一九六一年には第一回中国婦人代表団の秘書長として来日され、日本には関係の深い方です。落ちついた信頼感たっぷりな風彩の持ち主です。

この度の代表団の服装はグレー一色でなくカラフルになったことはすばらしい変化です。団長さんの上着はうすピンク色の地模様で、ズボン姿ではなくスカート、それも膝がかくれる程度の短かさ、靴はハイヒール、髪はパーマでうす化粧で夜のパーティにふさわしく、YWCAから贈られたきれいなブーケを胸につけてとても中年女性の品格がはえて美しい。

私は中国語はさっぱりわからないが、会場には代表団付きの通訳二人、それに中国語を話せる人が大勢いて不自由なく代表団員と打ちとけて交流ができました。

日本と中国は国の政治主義はそれぞれ異っても、同じ肌の色の隣同志の間柄、何千年もさかのぼれば同じ先祖にたどりつくかも知れない。打てばひびく心の通いを大切にしたいものです。

Circular Letter No.53

Dec. 8 1978

国際連絡書記　佐野アヤ子（訳）

クリスマス及び新年のご挨拶を申し上げます。本年も国際女医会のために、大いに働くことを望みます。Corner 会長は WHO のことでインドに参りましたが、前国際女医会長 Thieme とドイツ会長 Heuser と共に皆様にベルリン会議後の感謝の言葉と新年の挨拶を伝えるよう書かれてある。

一、ベルリン会議において発表されたpaperが必要な方は連絡書記まで申し出て下さい。すぐ国際本部から送るようにする。

二、第十六回国際女医会の報告書は作成中である。1976～1978年度の各国の国際連絡書記の例年の報告を必ず提出すること、同時にその間に死亡された方々の名前も出すこと。

三、この報告には1978～1980年度の各国の会長及び連絡書記の名前が記入されてある。名前が変った時には必ず正確に連絡してほしい。

四、第十七回国際女医会の学術議題はMedical Priorities in Developing Progressive and Established Countries（発展途上国、先進国及び確立した国の医療の優先権について。）Speaker とTitle 及びAbstract（一五〇字）はウイン本部に本年八月一日までに必着、Paper の登録は別紙の特別Form で Speaker でなく連絡書記が必ずpaperを国際本部に送ること、国際本部では連絡書記がpaperの内容について責任を持つこと。

同じく国際女医会議において出席会員の登録も連絡書記が全責任を持って登録してほしい。

五、一九七九年は国際児童年であるから、これに関係ある仕事をしてほしい。

学術議題

（第十七回国際女医会一九八〇年）

発展途上国、先進国及び確立した国の医療の優先権について

次の提案された標題で登録されることを望む。

I 予防医療

(a) 伝染病—管理及び発生
　—有効な予防処置
　—予防注射

(b) 衛生教育—環境衛生
　—個人衛生
　—母子衛生

(c) 産業医療—安全方法
　—外傷の予防

II 栄養

暴食、栄養不良

ビタミン欠乏症

III 地域の衛生計画及び地理的問題

人口に関連する衛生クリニック

病院の設備

医師及びparamedical の共同利益のためにプールすること。

医師及びparamedicalの教育設備

患者の正しい処置、医療及び病院設備の利用

IV さらに計画を促進する

V 他に関連ある問題について

VI 健康保険の重要性

VII 薬剤（麻薬）の利用力の問題

VIII 今日、社会の麻薬常用者増加問題

(a) 社会的問題

(b) 経済的問題

(c) 医学的問題

(d) 予防の方法

No.54

Feb. 15 1979

皆さまが心配されておられた第十七回国際女医会は、このたびの残念な出来事により、来年イランのテヘランでは開催出来なくなりました。イラン のPirnia 次期会長の許可を得て、国際女医会長 Corner の要望により、英国女医連盟が英国で一九八〇年に第十七回国際女医会を開催することに決定した。

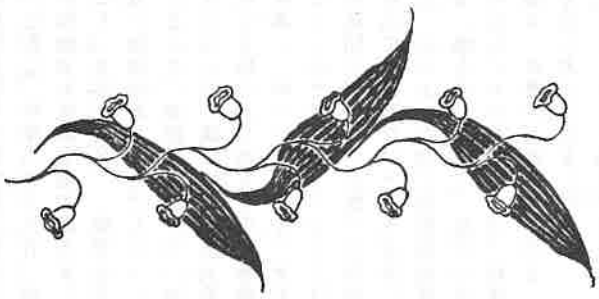
この第十七回国際女医会はイギリスのBirmingham で新しいBirmingham Metropole Hotel Complex で八月十七日より二十三日迄の間開催されます。

学術議題はMedical Priorities in Developing Progressive and Established Countries 発展途上国、先進国及び確立した国々における医療の優先権について。

これらのホテルは最もモダンで、美しい田園にかこまれた新しい国立博覧会場にある。歴史的な場所で、Stratford on Avon (Shakespeare 記念劇場）の近くでBirminghamより七マイル離れた場所にある。そこには鉄道駅があってBirmingham国際列車が各市に連絡している。ロンドンからは列車で一時間、バスで二時間、近くに飛行場もある。

以上皆さまに伝えるようおねがいします。

Dr. Martha Kyrle
Honorary Secretary



支部だより

愛知県

支部長　森川みどり

小鳥の囀を窓辺にきくこの頃でございます。紙面の関係上支部の活動報告のような内容でございますが左記させていただきます。現在の会員数は二二八名内最高年の先生は八十三才で今なお現役で一日数十名の患者の診療にあたっていられ、医師免許を取得されたばかりの若い会員と巾広い年令構成となっております。支部結成以来十六周年を迎え愛知県医師会館内に事務局をおいてその組織は確固不同のものとなり、今では支部は一分科会として医師会運営にも参画し、地域医療活動にも女医会代表を出しております。例えば愛知県社会保険診療報酬支払基金審査委員に三名、国保審査委員一名、労災審査委員一名、保険指導委員会委員二名、医師会活動として調査室、広報、社保、健康教育等の各部に委員を送り、またほとんどの分科会には理事として活躍しております。地域社会活動としては、愛知県青少年育成審議会委員、名古屋市勤労婦人センター運営審議会委員、名古屋市婦人会館の電話育児相談の指導顧門等に委員を派遣しております。支部としては毎月医師会館において定例の理事会を開催し年一回の総会には総会行事にあわせ各界の知名人を招いて一般教養の特別講演会を行っています。また年一回レクリエーションとして一泊旅行を楽しみ、年一回クリスマスか新年宴会を開催、この日は会員の独唱、舞踊、仕舞等に興じ懇親を深めています。福祉部活動としてはこの他に会員の慶弔に関してはもちろん、九月十五日の老人の日には、八十才以上の長老会員をお訪ねしたりお招きしてお祝いの品を贈り、懐旧話を承ったりいたしております。支部の事業として特筆すべきは「婦人と子供の健康相談」を昭和四十年一月に発足し、この事業はすでに十四年目を迎えました。毎月一回医師会館において全科にわたる相談を受けております。一日に平均七、八十名の相談者があり、常日頃ゆっくり相談したくてもどの医療機関も診察に手一杯で仲々時間をかけて話を聞いてもらえない、いろいろの心配を持って、県内各地からお母さん方が子供を連れて訪づれます。全科それぞれ専門の担当者が親身になって、しかも女性同志という気安さもプラスして大変感謝されています。そのためこの事業は、各方面から注目賞賛されて県医師会からはもちろん表彰されましたし新聞にも再々掲載されました。年度末には来館者（相談者）にアンケートを送り集計をとってこの事業のよりよい充実のための参考にしています。毎年その回答は、親切に相談にのっていただいて嬉しかった、また行きたい、がほとんどを占めて担当者の労苦にこたえています。支部の会報は年一回発行、編集委員会を設け、その年のテーマを決めて原稿募集し、毎号変化に富んだ楽しい会報が出来ております。編集委員会は昨年から新しく「愛知県女医史」を編纂する企画をたて現在資料の収集につとめています。学術部としては女医会独自の学術講演会を年に四回開催していますが毎回多くの熱心な聴講者があります。吉岡弥生賞記念森川賞、これは私が第一回に吉岡弥生賞を受賞した記念にその賞金を基礎として基金を作り女医の地位向上に努力した会員を表彰するために制定したものでございまして、定時総会の席上で表彰をいたしております。役員選挙は支部の定めた選挙施行細則に従い在宅投票で理事を選出し、支部長は総会の席上で出席会員から投票によって選出される方法をとっています。任期は三年間。今後支部の活動方針として会員全体のレベルアップはもちろん、地域医療に対し女医の特性を生かした活躍を充実させたい。また若い会員とのコミニケーションを深くし、それぞれの志向の相互理解と協力を図りたいと考えています。

昭和五十四年三月

東京都練馬区

支部長　石原　幸子

私ども練馬支部の現況をとのお話でしたが、今こうしてふりかえってみますと、私が支部をお世話して以来二年間、ただ集まって、食べて、喋って終った様な会であったと自責の念にかられる思いがいたします。

現在女医会登録会員は二十八名ですが、年に一～二回の会に出席する常連は十名足らずで、いつも淋しい思いがいたします。実際練馬区で開業している女医さんは七十数名おります。一度全員宛に会の招待状を発送したところ、返信四十八通で、出席はやはり十数名でした。何か魅力的な会をと心がけ、おいしいお店をみつけては会場を設定しております。レンガや、アメリカンクラブ、ビストロドパリ（高輪プリンス）、また昨年の忘年会は足をのばして、八王子のステーキハウス〝うかい亭〟にいたしました。参加者八名でした。

しかし、昨年六月十八日、始めての勉強会を医師会館で開きましたところ、女医十八名、一般男子会員五名の参加があり、私どもホッといたしました。演題は今流行の〝MCLSについて〟講師は女子医大第二病院小児科の浅井利夫先生、皆熱心に聴講し、終ってサンドイッチを食べながらのディスカッションでは、日頃疑問に思っている数々の質問が多数出て有意義なひとときを過しました。このような会に比較的出席者が多い事を考えますと、年に一度は平均的なテーマを取り上げ、勉強会を開き、教養の一端とするのも一つの方向と考えられました。

こうして七十数名の女医を包含する区でありながら、二十八名の会員、十数人の出席者のくり返しは、会の発展をのぞむ時、屢々考えさせられる問題でありましたが、二年もたちますと、このような線光花火のような会もまた楽しいのではないかと気楽に考えるこのごろです。

私にも言わせてほしい

愛知県　佐藤千代子

「医者にも言わせてほしい」（志賀貢医博著）

日本女医会誌第七十六号「巻頭言にかえて」の中で川那部副会長がこの本をご紹介くださいましたことを大変嬉しく思いました。私もすでに読んでおりまして川那部先生とまったく同じく「よくぞ書いてくださった」

と、積年の鬱念が晴れる思いでした。その後、時を経ずして「患者にも言わせてほしい」（生天目昭一著）―武見会長にもの申す―という本が出ました。物事を相対する面から見るとまったく異なるみ方、受取り方が生ずるのは当然ですが、医療の場において今日ほど医師と患者の相互理解、信頼関係の崩壊が宣伝されていることは何に起因するのか考えさせられる問題です。マスコミによる不当な記事の取扱いももちろんその一因です。生天目氏は新聞記事は九〇％事実を伝えていると書いておられます。新聞が真実を伝えない、マスコミは嫌いだというなら新聞など取らなければよい、日医ニュースだけ読んだらいいと。医療の問題に限らず、どんな小さなことでも一人一人の意見を述べあう機会があればその意見は集約されて正しい結末が得られるでありましょう。私達一人一人は患者との信頼関係がうすれたとは思っていません。しかし大多数の中で少数であっても強い声（マスコミはその極端）が支配すれば、あたかもそれが世論であるかの如き錯覚を生じ、そのため当然歪みも崩壊も起り得ます。確かに自分の診療行為も自ら汚している医師もいないとは断言出来ません。大多数の医師は今でこそ夜中に起される回数も減りましたが、しかし十年前二十年前をふり返ってみますと、日曜日でも外来診療をしていました。インフルエンザでも流行すると午後の往診は十軒二十軒と廻り、寒夜に寝たと思ったら、また起されて朝までふとんの暖まる暇のなかったことを覚えていられる方も多いと思います。この積年の医師の挺身が土台となって日本人の平均寿命が驚異的な延長を来したのだと思います。もちろん、ペニシリンに始まる抗生剤の発見、生活環境の向上、予防医学の推進、これらが平均寿命の延長に大いに寄与したことも明白です。しかし後者の原因だけならば、医療先進国では当然肩を並べてしかるべきでありましょう。各国とくらべ日本の医療体制（開業医制度）のちがいと医師の努力が、日本の平均寿命を世界のトップに迄躍進させたエネルギー源だったと言えましょう。しかしその輝しい平均寿命の延長が達成された今、その土台となった医師の努力は意識的に隠蔽されています。近年医療費の高騰は世界的な趨勢であるにかかわらず、日本の医療費の増高が即、医師の増収という短絡的結論で医師にのみ責任を転嫁しています。日本ではこの二十年間において国民皆保険と福祉医療という二つの大きな医療制度改革があり、そのために医療需要の急激な増加が国民医療費増高に大きな役割を果しています。

すなわち量的な面では国民皆保険にともなう受診率の増加、潜在疾病の顕在化、公害増加にともなう病人の増加、老令人口の増加による疾病増であり、質的な面として、疾病構造が変化し複雑な医療を要する病気が増えている。高度の検査、治療技術が開発されてそれを適用する機会が増えている。新薬の開発、医療設備や従事者の充実、医事紛争が多くなりあらゆる検査をしておかなければならない。

このように医療の量の増加に加え医療の質の高度化があいまって、必然的に医療費の増高を来しているのです。しかるにマスコミを始めとして医療費の増高をまったく一方的に医療費の無駄使いときめつけ、薬づけ、乱診乱療、検査づけと架空請求ならぬ架空宣伝をしております。そして救急医療を始めとし医療財政問題等、医療行政の怠慢による医療のひずみに対する国民の不満を巧みにそらすために、医師えの不信感を造成しているとしか思えません。

その一例として渡辺前厚生大臣が「日本の医療ここに問題あり」というパンフレットを作り、国会議員を始め各方面に配布されましたのをお読みになりましたでしょうか。これこそまさしく医師不信感造成のための手引きともいうべきもので、医療費に関する多くの数字の中から故意に適当に虚構の結論を出すために都合のいい数字だけ取上げて説明されています。曰く「年間五千万円も稼ぐ開業医」というタイトル、まず大低の人に医師は五千万円も所得があるのかと思わせる作意です。その他十数項目にわたるタイトルは商業新聞そこのけの誇張にみちたもので、医師を攻撃することに終始し、世論を

昭和五十二年度　日本女医会員　学位取得者一覧表（敬称略）

昨秋学位取得者について、全国の医科大学に調査方依頼いたしましたところ、四十七校から九十一名の解答を得ましたが、そのうち日本女医会会員としてご入会の方は十六名という結果です。なお、未加入の七十五名の方にはご入会のおすすめを書状にてお送りしました。

学術部

支部名	氏名	卒年	出身校	論文名
群馬	福島　淑子	昭46	昭和大学医学部	嗅覚障害の治療法―特に副腎皮質ホルモン点鼻法に関する臨床的研究
杉並	須田　明枝	昭44	東京女子医科大学	疑核周辺部網様体の電気刺激による吸息性ニューロンの抑制と呼吸相の変化
杉並	大野　弓子	昭49	〃	補体第三成分の保存による変化について
新宿	川畠　弘子	昭46	〃	頭蓋内病変による頭痛の発現部位
中野	新井　寧子	昭44	〃	視運動性眼振の正常反応とこれに影響する因子
中野	奈良　成子	昭46	〃	慢性肝疾患における血清α―Fetoprotein の臨床的意義に関する研究
目黒	小島　幸枝	昭43	東邦大学医学部	低レベル騒音の純音域値に対する影響について、特に暗騒音の影響
目黒	和田恵美子	昭45	東京女子医科大学	急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群（川崎病原菌）における臨床血液学的研究
東女医学内	岩本　絹子	昭48	〃	母児感染における新生児大腸菌感染症の発見機序に関する細菌学的研究
東女医学内	斉藤　洋子	昭48	〃	生殖に関するマイコプラズマの研究
東女医学内	野上　敬子	昭48	〃	Toxoplasma oocyst の感染母体と胎児に関する実験的研究
東女医学内	田島　節子	昭42	〃	小児難治性てんかんのケトン食療法に関する研究 第一編　臨床発作面からみた飢餓およびケトン食療法の効果 第二編　飢餓およびケトン食療法中の脳波所見の推移に関する件
神奈川	西井　華子	昭42	東邦大学医学部	癌症例にみられる背髄病変
神奈川	朝倉みどり	昭44	東京女子医科大学	子宮頸癌根治照射による小腸障害の臨床的ならびに実験的研究
大阪10	宮崎紀美子	昭34	関西医科大学	慢性中耳炎における骨性耳管のX線学的及び病理組織学的研究
福岡	重森　優子	昭45	東京女子医科大学	発声時の呼気使用に関連した検査――臨床的研究――

医療不信に陥れんがためであり、真に国民の医療を考えなければならない立場の厚生大臣が書かれる文章であろうかと悲しみさえ覚えました。

「患者にも言わせてほしい」の著者はご自身を含めご家族のほとんどの方が重篤な病気の経験を重ねられ、心から同情を禁じ得ません。しかし悲運のご経験がすべて医師（公立病院の医師も含め）の誤診であり治療ミスによるものであったとされ、そのうちの一事例においては、少年時代の著者（もちろん生天目氏は医師でない）が指適した病名の方が正しかったという話も書かれてあります。三十年も前の疾病について今その診断治療の正当性をうんぬんすることは出来ませんので本当にお気の毒であるとしか言えません。著者はまた、医事紛争の裁判が長期になるのを防ぐ手段として「判事、検事各十名位を二年間位大学医学部に依託学生として入学させ、基礎、生理、解剖等を一年間臨床医学を(?)勉強させてみてはどうでしょう。単純に競争率から見てもむずかしさは、司法試験は医師国家試験の比ではありません。つまり頭の良い方は判事、検事の方という論法になりますので二年間位の医学部の履修である程度の医事裁判は、あるいは略式裁判とはいかなくても、今までより早く結審出来るようになるかも知れません。と述べておられます。この安易な考え方が、この有識者の真意としたら、何十年間日々少しでも勉強をして患者さんのためによりよい治療をと努力している私どもの診療行為も極言すればその結果のみから交通違反なみに律せられるおそれなしとはいえません。さらに著者は武見会長の態度が傲岸不遜であるのがけしからんと。「厚生大臣を侮辱した、いやしくも大臣は国民が選んだ議員である。私達支払う立場のお客様になんという失礼な言葉を浴せたのですか。今すぐ国民に対しお客様（患者?）に対し謝罪しなさい。」と。これが本当に活字で書かれているのです。この本が、患者の立場から医療の本質を論じていられるのかと期待をもって読み出しましたものの、ここにいたって失望を禁じ得ませんでした。

川那部先生が末尾に書かれました如く、私どもは信頼に価する医師であるための努力、反省、自我について十分心しなければならないことは言を俟ちません。

医療において真摯な対応こそ、デッチあげられた不信感の虚像を打破することと信じ、日々の診療に励むことも必要でしょうが、間もなく国会で審議される健保改正案―薬代の五割負担等―が患者に与える負担増は早期診断早期治療を阻害するものであり、医師も患者サイドに立ってこの改悪を阻止する積極的な行動も必要ではないかと考えます。

以上

日本女医会監事
森　千鶴先生を偲びて

副会長　川那部喜美子

森様は、ここ数年来、高血圧症、白内障、眼底出血等の向老期の運命的疾患と闘いながら、開業医の業務に従事され、本会の役員として協力をつづけて下さいました。昨秋十月十四日の夜間に突如襲った脳出血発作に倒れられ、ご入院後の最新最良の治療、ご家族のお手厚い看護の甲斐あって一時覚醒なさいましたが、再び昏睡状態に陥られ、人々の祈りも空しく十一月十七日についにお亡くなりになりました。まことに惜しく悲しいことでございます。

昨年九月末、本会の理事会のあと新宿駅でお別れしましたのがはからずも今生のお別れとなってしまいました。その時、「二メートル位しか見えないの」とのお言葉で、ギョッとなった私に「二メートル見えるから大丈夫」と答えられて平然と歩いて行かれ、芯の強さを思わせられたのでしたが、しばらく見送ったそのお姿が見納めとなりました。

森様と私は、昭和三年の夏に、関西医科大学の前身の大阪女子高等医学専門学校の第一回生として入学した同級生でありました。入学後、多人数の大クラスをとりまとめて、級総代的な役割をして下さっていたお姿が鮮かに記憶に残っております。

学生時代から「春風駘蕩」といった温い雰囲気を持たれた姉様タイプの方で、やがて在学中にママさんになられた三人中の最年長で、人生の大先輩的存在でした。

卒業後程なく、当時はまだ遠隔地と思われていた関東へ移られ、長い病院勤務医生活の後に、現在の国分寺の地で自宅開業されました。

昭和八年の夏の私どもの卒業に当り、故吉岡弥生先生が西下なさいまして、大阪で日本女医会としての歓迎会を開催されました。したがって森様は、戦前においても東京における女医会の行事などには多分参加しておられたことかと考えます。

戦後に日本女医会大同団結の気運が活発化してからは、森様は在京及至在関東地域の加多乃会所属女医の代表としてその中に参加、昭和三十年五月の日本女医会再発足の準備活動に参画されました。組織化されましてからは、加多乃会推挙の理事、常任理事として、殊に加多乃会は大阪に本部がありますため、森様に会の窓口的役割、時には代表的役割で、日本女医会への協力を依存することも少くはありませんでした。爾来長く本会の役員の方々の信頼を担われ、十年一日の如く終始変ることなく尽力して下さったのでございます。

先頃の本会主催の国際女医会東京会議の際には、会員の芸術展のオーガニゼーションを令妹の倉八千代女史とご一緒に担当され、立派な成果を挙げられ、本会の事業に花を飾る功績をたてられましたことはまだ記憶に新しいところでございます。

ご多忙な開業医生活のかたわら、私どもの同窓会においては初代関東支部長をお引き受け下さり、同窓会活動に絶大な協力をしていただきました他方母校から遠い地域の同窓生のために一方ならぬ親身のお骨折りをしていただきましたのでした。

一方医師の生涯教育に対して開かれた東京大学医師会主催の医学会には第一回以来参加され、先年皆出席の表彰を受けられた由承りました。真面目な努力家の一面を窺える思いがいたします。

また故福田幹子女史のお誘いで南画研修のグループに入られたとのことでしたが、クラス会の楽焼席で、「さすがに」との感歎の作をものされ、箱根の樹木園見学の際に植物学

にもなかなかの造詣をお持ちになるなど趣味も豊かな方でございました。

森様の悲しいお知らせは、私どもは秋の大分でのクラス会の夜、湯布院の宿で受けまして、倒れられる直前に電話でこのクラス会への参加を楽しんで話しておられたとの親友の一人が述べられて、一同は一層深い悲しみを味わったのでございました。

数々の人生の苦労、悲しみを越えることによって愈々人格に磨きがかかり、いつもにこやかに穏かなお顔で接しられた森様をしみじみと懐しく想い出します。

お子様方は立派にご成人になり、それぞれの道にご精進される今は、森様もさだめしご満足なさっていらっしゃいましたことでございましょう。

私どもは長年公私ともにご厚情にあづかり深く感謝申し上げます。

森様、わが日本女医会については戦後再結成以来その充実発展を願って、あなた様ともども力を合わせてまいりました。今や新しい方向を目指して進むために、生みの苦悩の最中でございます。まだまだ時間はかかるとしましても必ずよりよい道が拓かれる筈でございます。

どうぞ見守って下さいませ

終りに長年月、本会のためにご尽力いただいた森千鶴様のご功績をたたえ、心からみ魂に平安な静まりあれかしと念じる次第でございます。

（昭和五十四年三月二十三日記）

常任理事会議事録

日　時　昭和五十三年十二月二十三日(土)午後二時十分～四時四十分

場　所　至誠会館　四階会議室

出席者　（敬称略）

三神、小俣、山崎、久保田、中川、野沢、福永、松岡、森川、守安、国際連絡書記佐野、

欠席者　（敬称略）

川那部、稲葉、丸山、柳瀬

庶務報告　久保田常任理事

11月25日　常任理事会、理事会を行う。

12月2日　中国婦人代表団歓迎レセプションに湯本アサ先生出席（別紙報告あり）

12月11日　中国婦人代表団主催による歓迎のお礼会に三神会長、野沢常任理事出席

・小沢辰男氏より厚生大臣退任あいさつ状あり

・婦人問題解決のための「東京都行動計画」の送付あり

・㈱クレサンベール、カサイ主催による招待状に、当会に許可なく、「日本女医会」の名前を入れたことに対し厳重なる抗議と詫び状をとった。

会計報告　福永常任理事

11月分別紙のとおり

・収入の部の会費額は十一月現在一、一八〇万入金し、予定どおり順調に入っている。

・エディークラフトより来月支払う分のうち今月中に内金として支払ってほしいという希望に対し、年末のみ特例として内金を支払うことにする。

・ルーペンダン代金の入金が遅れている方には連絡をとり入金を願う。

以上　松岡宏子

理事会議事録

日　時　昭和五十四年一月二十七日(土)午後三時十分～五時四十五分

場　所　パレスホテル

出席者　（敬称略）

三神、小俣、山崎、稲葉、久保田、中川、野沢、福永、松岡、丸山、森川、守安、尾中、大原、川口、川島、佐藤、竹内、野中、橋本、平瀬、福島、藤井、藤田、八木、山口、山本、白浜、添田

欠席者　（敬称略）

川那部、柳瀬、大西、佐野、鈴木、野呂、蓮井

庶務報告　久保田常任理事

12月23日　常任理事会を行う

12月27日　定款改正案を全会員に発送

1月3日　日本女医会友好訪中に～18日　十一名参加

1月17日　日中友好協会新年の集いに中川常任理事出席

1月20日　評議員会開催通知発送

・林胤子先生ご遺族より香典の礼状あり

・お正月メキシコ旅行参加応募者なし

・厚生大臣橋本龍太郎氏、厚生政務次官山崎拓氏の就任挨拶状あり

・大西保乃先生手術入院のため役員一同として金五万円見舞う、後日礼状あり

会計報告　福永常任理事

12月分別紙のとおり　承認

議　題

一、昭和54年度事業計画及び予算案について

(a)事業部　尾中理事

日本女医の実態調査費一〇〇万円（印刷一五〇円送料一〇〇円）×四、〇〇〇

助成（公衆衛生、社会福祉、へき地診療、支部）

年金、ルーペンダン、他

(b)学術部　森川常任理事

吉岡賞九〇万円、奨励金二〇万円、講演研修費五〇万円

(c)広報部　丸山常任理事

会誌費（印刷、送料）×四回二五〇万円

(d)渉外部　中川常任理事

国内国外渉外費　二五万円

(e)庶務部　松岡常任理事

俸給、諸手当、備品（耐火金庫）通信、印刷、会議費等を増額し一、九九四万一千円

二、臨時評議員会、臨時総会について　松岡常任理事

(a)臨時評議員会について

日時　昭和五十四年二月十日午後二時

場所　至誠会館会議室

・司会は庶務一任、速記者をおく

・議長選出　出席評議員の互選

・議事録署名人選出　会長指名

・評議員が欠席の際は代理人を立てること、代理人は発言権、議決権を有する　決定

・評議員と理事は兼任出来ない

・理事は票決に参加出来る

・緊急動議は受付ない

・傍聴人は会長にその旨申請すること

・定款の説明は山本杉理事（定款委員長）

(b)臨時総会について

日時　昭和五十四年二月二十五日

場所　京王プラザホテル

三、定款について

第二章第四条につき検討

第五章第三節第三十六条二項につき検討

施行規則

第二章第四条につき検討

第三章第十四条一項(1)につき検討

四、定時総会、役員選挙について

日時　昭和五十四年五月二十日

場所　京王プラザホテル

出席者に女医会ネーム入り風呂敷呈上

役員（改選につき）立候補届は、三月二十二日まで受付

五、その他
(a)臨時理事会　二月二十四日
(b)学位取得者の論文は本部にて表題のみを保管する
(c)会館建設準備委員会委員選出の件
(d)国立婦人教育会館の公開講座について
以上　野中久子

日時　昭和五十四年二月二十四日(土)午後三時十分～五時五十分
場所　至誠会館　四階会議室
出席者（敬称略）
三神、小俣、川那部、山崎、稲葉、久保田、中川、野沢、福永、松岡、丸山、森川、守安、柳瀬、尾中、大西、川口、川島、佐藤、佐野、鈴木、竹内、野中、橋本、蓮井、平瀬、福島、藤田、八木、山口、山本、白浜、添田
欠席者（敬称略）
大原、野呂、藤井

庶務報告　松岡常任理事
1月27日　常任理事会、理事会、新年会をパレスホテルで行う。
2月6日　日本女医会誌発送
2月8日　臨時総会通知、告示の発送
2月10日　臨時評議員会を至誠会館四階会議室にて開催
2月17日　臨時理事会　流会

・由布惇先生ご遺族より香典の礼状あり。
・日本中国友好協会全国本部より中国よりの医学研修生受入れに関するアンケートに協力依頼の挨拶と中国の歴史を学ぶ婦人友好訪中団のおさそいあり。
主催　日本中国友好協会
期間　昭和五十四年四月四日～十八日
経費　三十五万円
・東京都労働経済局より〝女性のための職業、労働講座のお知らせ〟あり。
日時　昭和五十四年三月六日、七日、九日、十三日、十五日、十七日
場所　東京都勤労福祉会館

会計報告　福永常任理事
1月分別紙のとおり　承認
傍聴者八名入場（敬称略）
富永睦子（広島）青木豊子（広島）加藤茂子（広島）嘉屋文子（広島）熊手照代（福岡）伊藤慶子（静岡）明石みち代（世田谷）小出つる子（高知）

議題
一、昭和54年度収支予算案について
別紙どおり昭和54年度収支予算案の説明が守安常任理事よりあり。
(a)奨学事業費の吉岡弥生賞を別会計にした。
(b)会費値上げ案と積立金取崩し案とを検討の結果、昭和五十四年度収入の部の不足分は事務所引当金と準備積立金の取崩しにすることに拍手多数にて承認された。
三、その他
(a)定款について
昭和五十四年二月十七日緊急理事会にいたるまでの報告が会長よりあり、昭和五十三年十一月二十五日理事会での定款についての審議や採決等について種々検討の結果（定款の変更）第三十七条定款の変更は、総会、理事会、評議員会において、それぞれ出席総講成員の三分の二以上の同意を得る、を確認できなかったので、それを今日採決するか、またはその必要がないかを挙手する。出席理事三十一名中採決する必要なし十六名、以上の結果となり定款改正案は理事会案として可決したことを再確認する。
(b)理事会での決定事項を確認し、議事録を作成すること。
(c)国際連絡書記報告　佐野国際連絡書記
・国際女医会第十七回国際会議の開催国が英国に変更になった。
・演題提出及び参加希望者は国際連絡書記を通して申し込むこと。
三、臨時総会について
臨時総会式次第については庶務部に一任する。
以上　松岡宏子

事務局だより

支部長変更（敬称略）
広島県支部長　富永睦子
大阪2支部長　肥塚典子

会員物故者（敬称略）
林胤子（兵庫）仁尾千枝子（目黒）竹村由美子（新宿）由布惇（福岡）牧野喜代（愛知）

入会々員（敬称略）
保科春美（兵庫）角家丕子（石川）杉野杜子（福岡）恒村麗子（京都）後藤京子（北海道）金苗美智子（福岡）宮内裕代（大阪10）萩原京子（世田谷）鎌田怜子（世田谷）

自然退会復活者（敬称略）
栗橋サト（杉並）

新卒入会々員（敬称略）
杉浦朱美（北里大）片岡広子（東女医）前田瑠子（川崎医大）勅使河原紀子（名古屋保健衛生大）上野英子（東北大）知久よね子（北海道大）早野恵子（熊本大）山内けい子（東女医）吉田泰子（東女医）保木本早苗（岐阜大）助川博子（信州大）山崎恵美子（秋田大）鈴木美千子（秋田大）佐々木良子（秋田大）

退会々員（敬称略）
杉浦正枝（愛知）奥千代子（福岡）平井温子（香川）小津良子（静岡）河野富士子（中央）中木蔦子（京都）玉盛やす子（新宿）窪田清（愛知）鈴木樹子（岐阜）村岡美子（奈良）田村ゑい（練馬）大久保順子（千葉）村上真理子（愛知）新堀千代子（渋谷）平岩扶美子（神奈川）

編集後記

満開の桜花と柿の若葉が美しい今日この頃、会員の先生方にはお元気にご活躍の事と存じます。私ども広報部にとって、いよいよ最後の会誌発行となりました。

その間、第十六回国際会議や定款に関する問題など種々大きな変化に直面した時期であったと思われます。また日本女医会にとりまして大変悲しく残念な事は、上田葉理事、森千鶴監事を失ったことでございます。頭脳明晰な両先生は見事にその任を全うされました。今その数々がなつかしく思い返されるのでございます。

今回、ご多忙中をご執筆おねがいいたしました三神会長の訪中旅行印象記には、なごやかなうちに立派に日中友好の親善を果され、さらに戦前日本女医会々員であった王碧雲女史（鶴風会）がお元気にご活躍されておられるとの記事がございます。このように大変うれしいニュースが聞かれる一方会員を失う悲しさとを合わせ考えます時、今さらのように「一期一会」を大切に考えてまいりたいものと思うのです。

会員各々の一致協力による日本女医会のますますの発展を心からねがってその責を終らせていただきます。（野沢）

昭和五十四年四月二十日印刷
昭和五十四年四月二十五日発行
編集人　丸山芙実
発行人　日本女医会
発行所　東京都新宿区市谷河田町19
社団法人　日本女医会
TEL 341〇九六八
印刷所　東京都文京区本駒込一―七―十五
株式会社北斗社